

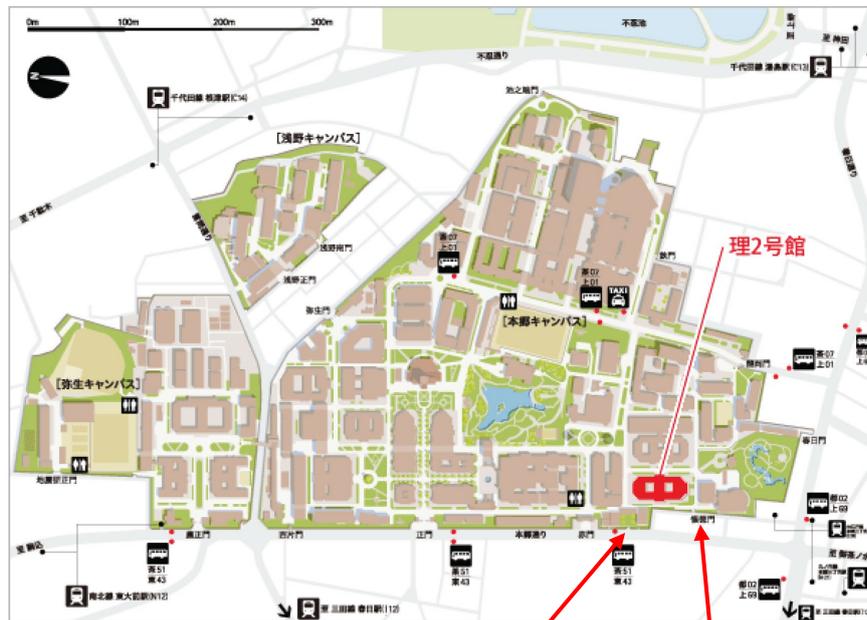
日本学術会議主催シンポジウム

人間にとって学習とは何か？

学習と教育の重要性が高まる今、人類学の多様な視点からその本質を問う

2025年3月20日（木・祝） 13:00～16:30（開場 12:30）
東京大学 理学部2号館4F 講堂（東京都文京区本郷7-3-1）
オンライン同時配信（一般公開）

どなたでもご参加いただけます
要事前登録（下記フォームより 3/16 まで）



伊藤国際学術研究センター門 懐徳門 本郷三丁目駅
(丸の内線・大江戸線)

本郷通り側（地図の下側）の入口から建物へ入り4Fへお上がりください

主催：日本学術会議統合生物学委員会 自然人類学分科会
後援：日本人類学会、日本霊長類学会、日本文化人類学会、日本人間行動進化学会
日本成長学会、日本生理人類学会

プログラム

12:30 開場

13:00 開会挨拶

村山 美穂（京都大学野生動物研究センター）

13:10 第1セッション 話題提供「人間にとって学習とは何か？」

司会 松本 晶子（琉球大学国際地域創造学部）

- ① 霊長類学の視点から：同調・伝染から模倣・協力へ至る社会学習の生物学的基盤
香田 啓貴（東京大学大学院総合文化研究科）
- ② 行動進化の視点から：社会学習の起源と帰結
井原 泰雄（東京大学大学院理学系研究科）
- ③ 形態学の視点から：ヒトの脳化と学習の起源と進化
荻原 直道（東京大学大学院理学系研究科）

休憩（14:10-14:20）

- ④ 成長学の視点から：カラダ・アタマ・ココロのせめぎあい
山内 太郎（北海道大学大学院保健科学研究院）
- ⑤ 文化・歴史的発達の視点から：遊び、学習、労働をつなぐ社会的基盤
高田 明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）
- ⑥ 人類史の視点から：文明と学習
松本 直子（岡山大学文明動態学研究所）

休憩（15:20-15:30）

15:30 第2セッション 総合討論「教育現場との交差」

司会 海部 陽介（東京大学総合研究博物館）

- ⑦ 教育現場より：自律的に学ぶ子どもを育てる～自分らしい学びの創造～
西田 淳（奈良女子大学附属小学校副校長）

16:25 閉会挨拶

宮路 淳子（奈良女子大学大学院人文科学系）

話題① 霊長類学の視点から：同調・伝染から模倣・協力へ至る社会学習の生物学的基盤

香田 啓貴（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

ヒトは霊長類の仲間で、サルと多くの面で共通点が存在します。日本で誕生したとも言える霊長類学は、ヒトに最も近縁なサルとの比較を通じて、ヒトを特徴づける言語や社会、文明といった、ヒトに固有な「生命現象」の進化的な起源を探ることを目的とした研究分野です。とりわけ、集団の中で伝わる行動（文化的行動）などは、宮崎県幸島でのニホンザルの芋洗い行動に代表されるように、霊長類学の中心的な興味の対象です。

文化や文明は、社会集団の中で定義され、個体間での行動の伝達・伝播によって成立する現象です。行動の伝達は学習によって成り立ち、養育者から乳児が学ぶ過程に現れます。世界に対する情報を何も持たず無垢な状態で誕生する乳児は、母親などの養育者からの情報に絶えず晒されることで学習し行動を形成していきます。これは他個体が介在する学習で、個人が試行錯誤して行動が変容する個別学習・試行錯誤学習とは対照的な、**社会学習**と呼ばれる過程です。ヒトの場合、社会学習の過程で、乳児自らが養育者の行動を正確・迅速に学ぶ**模倣**に加え、養育者が乳児の行動獲得に積極的に介入する**教育**をします。さらに、個体間で**協力**することにより知識が共有・改善され、問題解決を加速させ、社会集団での行動の改善と適応性を向上させます。こうした循環が**累積**し、ヒトの文化と文明の形成を支えています。

一方で、ヒト以外の霊長類では、こうした模倣や積極的な教育、協力を通じた個体行動の改善が観察されることはありません。例えば、ヒトは発達の早期段階から養育者の話す母語に触れることで、母語を模倣し発声学習が進みますが、ヒト以外の霊長類では、こうした発声学習が成立しないことがわかっています。サルでは音声学習のみならず、相手の行為をそっくりそのまま取り込むような模倣（いわゆる「猿まね」）が起きず、多くの面で学習向上を加速化させる学習能力が限られていることが知られています。

このように、声を模倣する行動（音声模倣）一つを取り上げても、ヒトとサルの学習能力には隔たりがあります。しかし、「猿まね」がなくとも、文化的行動はサルでも見られるのも事実です。では、サルで行動伝達を成立させるのに、どのような仕組みが重要なのでしょうか？それは、思わず他者の感情が伝わり、行為が**同調**し、行動が**伝染**していく過程が、集団での行動形成では模倣と同様に重要であると考えられています。こうした霊長類の学習や行動伝達の特徴を眺めると、ヒトの社会学習や文化形成の固有性が浮き彫りになります。ヒトの社会では、サル社会にも存在する同調や伝染という仕組みの上に、模倣や教育、協力などの社会学習が加わった結果として、複雑な文化や文明が形成されたと考えられます。



話題② 行動進化の視点から：社会学習の起源と帰結

井原 泰雄（東京大学大学院理学系研究科准教授）

学習とは、ヒトを含む動物が、時間的、空間的に変動する環境に適応するための仕組みであると考えられます。もし環境が、時が過ぎても所を変えても同じであり続けるなら、動物はその環境に適した一定の行動をとっていけばよく、学習を通じて行動を変える必要がありません。しかし、実際の環境は常に変動しており、多くの動物で学習が見られるのは、おそらくそのためです。なお、ここで言う環境は、気候のような物理的環境の他に、周囲の生物からなる生物的環境、同種の個体が形成する社会的環境などを含みます。ヒトなど一部の動物では、これらに文化的環境を加えることができるでしょう。

便宜上、学習を個体学習と社会学習に区別することがあります。**個体学習**とは、動物の個体が他個体とは独立に物事を学ぶことで、「試行錯誤」が代表例です。**社会学習**は他者から学ぶ過程を指し、わかりやすい例は「模倣」です。変動する環境に適応するうえで、個体学習と社会学習のそれぞれに長所と短所があると考えられており、動物はこれらをうまく使い分けられているとも言われています。

さて、ある研究では、ヒトの2歳半の幼児と、ヒトに近縁な類人猿であるチンパンジーとオランウータンにさまざまな認知課題を与え、その成績を比較しました。空間認知などの物理的認知にかかわる課題では、幼児とチンパンジーの間に違いはなく、どちらもオランウータンより高い成績を示しました。一方、社会学習を含む社会的認知の課題では、幼児は2種の類人猿を大きく上回りました。ヒトは、読み書きを覚えたり学校教育を受けたりする前から、他者から学ぶことにかけては抜群の力を持っているようです。

社会学習を通じて個体から個体へと伝達される行動、技術、信念などを、一括りに文化形質と呼ぶことにしましょう。このように考えると、文化はヒトに固有の現象ではなく、他の動物でも文化形質の例が数多く報告されています。そのなかで、ヒトの文化の特異な点として、蓄積性の高さが挙げられています。文化の蓄積とは、世代を超えて文化形質に改良が加えられ、1世代内では達成し得ないような大きな機能性や複雑性の向上が起こることです。今日の人類の文明は、太古から途切れなく受け継がれてきた文化形質と、その上に幾重にも積み上げられた進歩の産物であると言えます。

ヒトは社会学習の能力が高いだけでなく、その行動が実際に社会学習の影響を強く受けることでも知られています。言い換えれば、ヒトには周囲に「流されやすい」性質があるということにもなるでしょう。この性質は、人類進化の過程で変動する環境への速やかな適応を促してきたと考えられますが、条件次第では、個人の幸福や社会の利益を損なうような有害な文化形質の普及を導く危険をも孕んでいます。

教育には、学習者の社会学習を助ける働きがあります。これは、学習者個人の人生を豊かにするとともに、人類が持つ膨大な文化形質を次世代に継承する営みの一端であると言えるでしょう。また、進歩を生み出し、無批判な社会学習を修正するのは、むしろ個体学習の役割です。他者から学ぶのと同時に、自ら考えることが大切なのは言うまでもありません。

話題③ 形態学の視点から：ヒトの大型化と学習の起源と進化

荻原 直道（東京大学大学院理学系研究科教授）

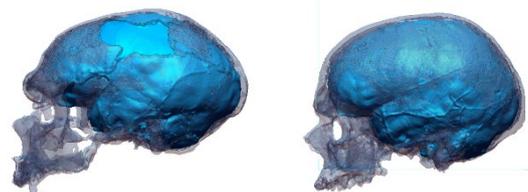
脳の大型化による高度な認知学習機能や複雑なコミュニケーション能力の獲得は、ヒトと他の霊長類を区別する最も顕著な生物学的特徴の一つです。しかし、大きな脳を発達させ、維持するためには多くのエネルギーを必要とするため、脳が極端に大きい動物はヒト以外にはほとんど存在しません。さらに、ヒトは大きな脳を成長させるため、他の哺乳類と比べて未熟な状態で出産しなくてはならず、出生後も長い期間をかけて脳を発達させる必要があります。こうしたコストの高い特徴を伴いながら、なぜヒトの脳だけが進化の過程で極端に大きくなったのでしょうか？

初期人類の化石頭蓋骨の内腔容積の時代的変遷から、**脳の大型化**は二百数十万年前のホモ属の誕生後に始まることが明らかになっています。この過程を解明するために、我々のグループでは、3次元モデリングと脳イメージング研究に基づいて、猿人や初期ホモ属の化石頭蓋骨から内腔形状とそこに収まっていた脳形態を数理的に復元し、各領域の相対容量と機能的特異性の違いを分析しました。その結果、脳の大型化が進行するこの時期に特に顕著に見られる脳の変化は、小脳の拡大であり、従来考えられていたような前頭葉の拡大ではないことが明らかとなりました。

小脳の機能は従来、身体運動の制御や調整、学習に限定されてきましたが、近年の研究により、小脳半球が言語、ワーキングメモリ、遂行機能といった高次脳機能にも関与していることが示されています。また、この時期は、初期人類における石器製作、積極的な肉食、協力行動の促進、遊動域の拡大といった大きな行動変容が見られる時期と一致します。このことは、小脳の拡大が、初期人類の身体的・認知的・社会的行動の進化を支え、小脳が大きくなる方向で進化が進んだ可能性を示唆しています。また、小脳半球は脳の異なる領域と広範につながっており、大脳皮質の各領域が担う機能の遂行にも重要な役割を果たしていることが明らかとなっています。猿人から初期ホモ属への移行期に小脳が大脳に先んじて拡大したことが、その後のヒト進化過程における大脳皮質の増大と密接に関連していると考えられます。

また、旧人**ネアンデルタール人**と新人**ホモ・サピエンス**の化石頭蓋骨から脳形態を復元し比較した結果、ネアンデルタール人の小脳がその時代のホモ・サピエンスと比較して相対的に小さいことが初めて明らかになりました。一時期共存していたネアンデルタール人とホモ・サピエンスですが、この小脳の違いが環境適応能力の差を生み出し、前者が絶滅し後者が現代まで生き延びる要因となったと考えています。

このように、小脳は単なる身体運動制御の役割を超えて、様々なシステムの入力と出力の関係を学習する汎用的な計算装置として機能し、大脳化の基盤を支えた可能性があります。学習装置としての小脳の拡大が脳の大型化を支え、ヒト特有の高次脳機能や行動特性の進化を可能にしたと考えられます。



話題④ 成長学の視点から：カラダ・アタマ・ココロのせめぎあい

山内 太郎（北海道大学教授）

ヒトの身体の成長パターンは、他の霊長類と比較して独特です。とくに、「**長い子ども期**」と「**思春期成長スパート**」が顕著です。身長の成長速度曲線を見ると、出生後から2歳頃までは急激に成長速度が低下し、その後は緩やかな成長が続きます。そして、思春期に入ると再び急激な成長（成長スパート）が起こります。このような成長パターンは、ヒトが複雑な社会構造や文化を発展させるための基盤と考えられています。長い子ども期は、社会的・文化的・技術的な知識や技能を習得するための重要な期間であり、この間に子どもは周囲の環境や人々との関わりを通じて多様な経験を積み重ねます。例えば、言語の習得や道具の使用、社会的ルールの理解など、人間として生きるための基本的な能力を身につけます。また、思春期は身体的・心理的な変化が顕著に現れる時期であり、自我の確立や個性の発揮が促されます。この時期には、仲間との協力や競争を通じて、社会的な役割や責任を学ぶ機会が増えます。

一方、脳は出生後から急速に重量を増やし、6歳頃には成人の脳重量の約9割に達します。その後、脳内では神経回路の再編成が活発に行われます。思春期の脳は発達途上であり、前頭前野の成熟は20代後半まで続きます。ヒトは生まれてから成人になるまで身体、脳、精神の成長・発達が相互に影響し合っているといえます。

私は、1990年代よりアフリカの熱帯雨林において、狩猟採集民のフィールド調査を行っています。狩猟採集社会における子どもの成長過程は、現代社会とは大きく異なります。まず、子育ては母親だけでなく、周囲の子どもや大人が協力して行います。私たちがカメルーンのピグミー系狩猟採集民を調査した際には、1人の乳児に対して1日あたり、母親以外に15.8人の子どもと大人が育児に関わっていました。この「**育児協働**」は、世話を受ける乳児だけでなく、育児に関わる子どもたちにとっても、多様な人間関係を築き、社会的なスキルを身につけるための貴重な経験となっています。

狩猟採集民の子どもたちは、森での遊びを通じて狩猟採集活動を学びます。濃密な自然環境の中で、生きた動物と直接的に向き合ったり、命の循環を身をもって体感することで、身体性をともなった学習が行われます。このような学習は、実践的で体験的な知識を獲得する機会となっています。思春期スパート開始前の子ども期は、生活に必要な知識や技能を獲得することが中心です。この時期の学習は、子どもの知的興味や好奇心に基づいて行われます。異年齢のグループでの活動も多く、年上の子どもから年下の子どもへ知識や技能が伝承されます。思春期に入ると、成長スパートが起こり、体の成長と心のギャップが顕著になります。自我が芽生え、個性や創造性が発揮される時期でもあります。仲間との活動や共同作業を通じて、社会的な役割や責任を学びます。

ヒトの成長パターンと狩猟採集社会における子どもの成長過程は、現代の教育に重要な示唆を与えてくれます。家庭や地域社会が一体となって子どもたちを育てることで、多様な人間関係や社会的なサポートネットワークを構築できます。さらに、身体性を伴った学習や異年齢のグループでの活動、興味・関心・好奇心に基づいた学習、そして模倣と試行錯誤を通じた知識の習得は、子どもの自主性や創造性を育むための貴重な機会となるでしょう。

話題⑤ 文化・歴史的発達の視点から：遊び、学習、労働をつなぐ社会的基盤

高田 明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

この発表では、文化人類学の立場から学習について論じます。もともと文化人類学者の多くは、近代社会における学校システムのような制度、すなわち「コミュニティの成人の活動とは別に、子どもたちを指導する目的で創り出された特別な場所で、大人が熟練した技能を子どもたちに教える」という仕組みが存在しない伝統的社会を研究対象としてきました。そこで文化人類学は、子どもの社会化にまつわる幅広いことがらを扱うことにより、西欧的な学校システムに治まりきらない文化伝達や社会の再生産の過程について分析や考察をおこなってきました。

たとえば、南部アフリカに暮らしており、現代の狩猟採集社会として知られるサンでは、子どもは**多年齢からなる子ども集団**を形成します。この子ども集団は狩猟や採集といった生業活動への貢献を求められず、**自律的・創造的な遊び**に長い時間を費やします。そうした遊びとしては、歌や踊り、大人の生業活動をまねた簡単な狩猟やままごとなどが人気です。これらでは、認知や体力に大きな幅のある子どもたちの多くが参加でき、年長児が年少児に手本を見せる機会が豊富にあります。その過程で、生業活動に必要な技術や知識は、大人が教えなくても身につけていきます。したがって、教育のための専門機関がなかった狩猟採集社会において、多年齢子ども集団での遊びは西欧の学校システムに比べうるような働きを担ってきました。こうしたサンの特徴は、狩猟採集社会一般、さらにはヒト本来の社会化のあり方を示唆すると考えられてきました。

しかし、その後の研究は、狩猟採集社会の中でも社会化の過程にはかなりの**多様性**があることを示すようになりました。たとえば、東アフリカの狩猟採集社会として知られるハッザの子どもは、自分自身や他の子どものためにかかなりの食料を調達することに加えて、水汲み、大人同士のメッセージのやり取り、育児など、家事にも大きな貢献を行っていたそうです。子どもによる生業活動や家事への貢献は、集団でおこなうネットハンティングや搔い出し猟、さらには母親以外を巻き込んだ共同育児が盛んな中部アフリカの民族集団アカやバカでも認められます。

こうした知見から、児童労働による搾取や虐待を連想する向きもあるかもしれませんが、それは早計です。民族誌的な報告によれば、上記のような狩猟採集社会における子どもの生業や家事にまつわる活動の多くには、サンの子ども集団での遊びと多くの類似点があります。さらには、大人の生業・家事活動も遊びの特徴をふんだんに備えています。大規模な児童労働による搾取や虐待はむしろ、産業革命期の西欧から急速に広まったことが知られています。それに対する反省は、学校システムの確立とそれによる組織的な学習が推進される一因となりました。仕事は、自発的に行われた場合には遊びに、いっぽう強要されて行われた場合には労働に、より強く関連した活動になりやすいのです。私たちの学習観は両者の間で揺れてきました。こうした揺れは、おそらく今の私たちの社会でも続いています。本シンポジウムでは、そうした遊びと労働の間になりつつ社会的活動として、人類社会における学習について再考します。

話題⑥ 人類史の視点から：文明と学習

松本 直子（岡山大学文明動態学研究所教授）

人間はさまざまな知識や技術を学習によって身に付けなければ生きていけません。しかし、何をどのように学習するかは、人類史の中で大きく変わってきました。とくに重要な転換点となったのは、文字の発明と普及でした。この報告では、文字をはじめとして人間が生み出してきた文明が学習をどのように変えてきたかを振り返り、これから私たちの学び方がどこに向かっていくのかを考えます。

文字が発明される以前の学習は、教える人と教わる人の直接交渉とそれぞれの実践的経験の蓄積が基本で、知識の伝達は口伝と暗記に頼っていました。物語や歌、儀礼などに組み込まれることで記憶しやすくする工夫がありましたが、知識の共有範囲は限定的で、語り部や長老の記憶力に依存するところが大きく、人口規模が小さい社会では知識の伝承が途絶える危険性もありました。文字が生まれたことにより、時間と空間を超えた知識の保存、整理、普及が可能となって学習と教育のあり方が変化し、より構造化され形式化された教育システムが生まれました。

約 1 万年前にいくつかの地域で農耕が始まり、都市が形成されたことで、学習のあり方は変化していきます。紀元前 3000 年ごろには、メソポタミアやエジプト、インドで文字が使用されるようになり、シュメール文明、エジプト文明、インダス文明が誕生しました。シュメール文明の楔形文字は、交易や法律などに関する行政的な記録を主たる目的とし、最古の学校とみられる遺跡も発見されています。エジプトではヒエログリフで宗教的な文書や天文学的な知識が記録されました。中国では紀元前 1300 年頃に甲骨文字を使った占いが盛んに行われ、ここから漢字が誕生しました。文字は、数学、天文学、医学などの専門分野を発展させる基盤にもなりましたが、古代においては王や貴族、書記、司祭、学者など特権的な地位にある人々が文字の使用を独占し、専門的な知識を管理していました。

15 世紀以来の印刷技術の発展や教育に対する需要の高まりによって文字が読める人の数は徐々に増加しましたが、識字率が急速に増加するのは 1950 年代以降のことです。テキストが大量に印刷され、ほとんどの人が読むことができるようになると、地域や世代を超えて教えられる標準化されたカリキュラムが誕生し、専門的な知識を一定の人々が同じように学ぶ学校制度が確立しました。

文字の発明と普及、それによって促進された技術発達は、知識の保存、拡大、普及を可能にし、地域に根ざした身体的経験や口頭伝承による学習から、読み書きを基盤とするグローバルで制度化された学習システムへと変わってきました。しかしながら、文字偏重の教育システムは、身体経験による学びの減少や、個性に応じた学習の阻害といった課題を抱えています。現在加速しているデジタルメディアの活用は、膨大な情報への即時アクセスや、インタラクティブで個人に応じた学習体験を可能にするなど、教育と研究のあり方を今まさに大きく変えようとしています。私たちは人類史的な学習の転換期にふたたび直面しているといえるでしょう。

話題⑦ 教育現場より：自律的に学ぶ子どもを育てる—自分らしい学びの創造—
～これまでの「教え伝える教育」のあり方を見直す～
西田 淳（奈良女子大学附属小学校 副校長）

現行の学習指導要領では、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」として、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善が求められています。

各学校では、この課題を克服するために工夫した授業実践や研究も日々行われています。しかし、これまで一般的に多くの学校教育で行われてきた「まず教師が丁寧に教え伝え、反復練習を通してできるようにする」という形からどうしても抜け出せないでいる実態も多く見えてきます。そのため、子どもたちは自分らしさを大切にしながら主体性を發揮することよりも、いかにして教師の指示通りに課題をこなすことができるかに意識が向くようになりがちです。今なお多くの現場で重視される「教師が丁寧に教えることで、何かができるようになる」ことが、果たして子どもたちの未来を子どもたち自身が主体的に切り拓き、創造していくことに繋がっているのでしょうか。「教師が教材研究も丁寧に行い、工夫した展開を考え、自作の教材教具も細かく揃え、その結果子どもたちの学習は見栄えよく、想定した通りの展開ができた」という教師の自己満足だけになってはいないでしょうか。

これからの時代を主体的に生きるための力が、私たちの指導によって子どもたちの中に育まれているのかを我々教師が今一度考え直す必要があると思うのです。

実際、「令和6年度全国学力・学習状況調査」の児童質問調査の結果（小学6年生）では、「授業内の課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」について、「当てはまる」とした児童の割合は29.6%しかありません。「国語が好き」と答えた児童の割合はさらに低く24.3%です。小学校の国語学習が好きという児童は、4人に1人もいないのです。この数値を見ても、現場での新たな取り組みは盛んに行われる一方で、児童の主体的に学習に取り組む姿勢が順調に育まれているとは言い難く、学習の面白さを実感できている児童も決して多くはないということです。

一方、本校児童の結果はそれぞれ全国の数値よりも大幅に高く、「まあ、当てはまる」を加えるとそれぞれ90%以上になります。それは、本校が大正期から「自律的に学ぶ子どもを育てる学校」として、子どもたちが個々に課題意識を持って探究する学びを大切にしていることが大きく影響していると考えます。では、本校が大切にしている学習とはどのようなものなのでしょうか。本校児童の学びの姿として、友だちの自由研究発表の内容から自分の課題を生み出し、探究活動へ繋げた2年生児童の様子と、国語科の物語を読む学習において、自分らしい学びを大事にしながら学習を深める子どもたちの様子を紹介します。このような機会を通して、私たちの教育の姿をさらに多くの皆様に知っていただけると幸いです。

講師略歴

香田 啓貴 (こうだ ひろき)

東京大学大学院総合文化研究科・准教授。専門は霊長類学・認知生物学。理学博士。京都大学で霊長類学を学び、京都大学霊長類研究所を経て、2022年より現職。霊長類の視聴覚コミュニケーションや社会行動、社会認知などのテーマについて認知科学や心理学の実験科学の観点と、霊長類学の動物自然史的な視点を通じて、ヒトらしさの進化史について調べている。インドネシアなどの東南アジアに生息する霊長類調査も推進している。日本霊長類学会高島賞(2016)を受賞。



井原 泰雄 (いはら やすお)

東京大学大学院理学系研究科・准教授。進化人類学者。理学博士。東京大学で生物人類学を学び、スタンフォード大学研究員、東京大学大学院講師を経て、2021年より現職。人類の行動の進化、文化の進化について、数理モデルや計算機シミュレーションを用いた理論的研究を行っている。編著書に『人間の本質にせまる科学—自然人類学の挑戦』がある。



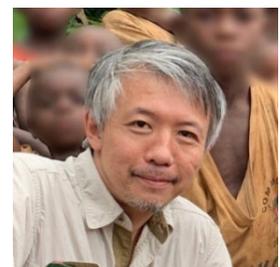
荻原 直道 (おぎはら なおみち)

東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻・教授。博士(工学)。慶應義塾大学にて機械工学を専攻し、特に二足歩行のバイオメカニクスを研究。京都大学で助教、慶應義塾大学で講師、准教授、教授を歴任し、2018年より現職。ヒトの身体筋骨格構造の適応を力学的視点から読み解き、二足歩行などヒト特有の運動機能の進化を解明する研究に取り組む。著書に『Digital Endocasts: From Skulls to Brains』(共著)、『身体適応—歩行運動の神経機構とシステムモデル』(共著)など。



山内 太郎 (やまうち たろう)

北海道大学 総長補佐／環境健康科学センター センター長／大学院保健科学研究院 教授。人類生態学者。博士(保健学)。途上国の農漁村、都市スラム、先住民社会において人々のライフスタイルとウェルビーイングについて調査研究している。近年は地域の社会課題に対して住民の意識・行動変容、社会変革を目指す「超学際研究」に取り組んでいる。著書に『講座サニテーション学(全5巻)』など。日本オセアニア学会賞(2009)、日本生理人類学会賞(2022)などを受賞。



高田 明 (たかだ あきら)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授。人類学者。人間・環境学博士。京都大学で心理学、人類学、アフリカ地域研究を学び、2022年より現職。狩猟採集社会における子育て、環境の知覚とナビゲーション技術、心と文化の関わりなどについて研究している。著書に『相互行為の人類学』、『ブッシュマンの子育て』など。大同生命地域研究奨励賞（2017）などを受賞。



松本 直子 (まつもと なおこ)

岡山大学文明動態学研究所・教授。考古学者。博士（文学）。九州大学で考古学、認知心理学を学び、2021年より現職。縄文時代を主な対象として、認知考古学、ジェンダー考古学の視点から文明形成のメカニズムについて研究している。編著書に『縄文時代のムラと社会』、『認知考古学とは何か』、『心とアートの人類史』など。



西田 淳 (にしだ あつし)

国立大学法人奈良国立大学機構 奈良女子大学附属小学校 副校長。研究教科は国語科。兵庫県宝塚市の公立小学校で15年間勤めた後、奈良女子大学附属小学校へ移り16年が経つ。今年度から同校の副校長を務めている。奈良、大阪、兵庫、京都、滋賀、三重、福井、愛知など関西圏を中心に他校の授業研究に関わり、指導を行う他、各教育委員会主催の研修会講師として講演も行っている。著書に『話す力、書く力、つなぐ力を育てる』、『令和の日本型学校教育を体現する学校』（共著）など。令和4年度文部科学大臣優秀教職員表彰を受ける。



司会者略歴

村山 美穂 (むらやま みほ)

京都大学野生動物研究センター・教授。保全遺伝学者。理学博士。京都大学で霊長類学を学び、畜産技術協会、岐阜大学応用生物科学部を経て、2008年より現職。野生動物のDNAから、遺伝的多様性、血縁関係、個体数予測、機能遺伝子、年齢など様々な情報を得て、保全や共生の手段を探る研究をしている。共著に『遺伝子の窓からみた動物たち』、『個性学入門』、『レジリエンス人類史』など。日本霊長類学会学術奨励賞(1992)、日本農学進歩賞(2003)などを受賞。



松本 晶子 (まつもと あきこ)

琉球大学国際地域創造学部教授。生物人類学者、理学博士。京都大学で人類進化学を専攻し、米国ラトガース大学でポスドク研究員などを経て、2010年より現職。フィールド研究者として、タンザニア・マハレ山塊国立公園でのチンパンジー調査や、ゴンベストリーム国立公園でのヒヒ調査を実施。その後、ケニア・ライキピアのOECMに調査地を設立し、ヒヒの対捕食者行動を研究することで、初期人類の集団行動の進化を解明することに取り組んでいる。



海部 陽介 (かいふ ようすけ)

東京大学総合研究博物館・教授。人類進化学者。理学博士。東京大学で生物人類学を学び、国立科学博物館を経て、2020年より現職。約200万年におよぶアジアの人類史を研究している。クラウドファンディングを成功させ、最初の日本列島人の大航海を再現する「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」(国立科学博物館:2016-2019)を実行。著書に『人間らしさとは何か』、『サピエンス日本上陸』など。日本学術振興会賞(2012)、海洋立国推進功労者表彰(2021)、日本人類学会賞(2023)などを受賞。



宮路 淳子 (みやじ あつこ)

奈良女子大学大学院人文科学系・教授。考古学者。人間・環境学博士。京都大学・奈良文化財研究所で環境考古学を学び、2005年に奈良女子大学へ着任、2016年より現職。2024年より奈良女子大学附属小学校校長を兼任。博物館学芸員課程も兼任。先史・古代の日本列島における環境と人間との関わり、史跡・文化財の保存と活用、奈良女子高等師範学校を含む戦前の学校教育標本などを研究している。日本文化財科学会ポスター賞(2018)、ダイバーシティ推進センター女性研究者賞(2024)などを受賞。

